

天理教がイスラームに関心を抱いた最大の理由は、ムスリム(イスラーム教徒)への布教の一環としてであったと思われる。戦前の文脈において、「イスラーム」とは、中国や満州、そして東南アジアにおけるイスラームが射程に入れられていた。日本国内において、イスラームがはるか異国の遠い存在であったのに対して、海外へ布教に赴いた天理教の布教師たちにとっては、イスラームは身近な存在であった。

このことにいち早く気づいたのが、中山正善2代真柱であり、また諸井慶徳は学術的なイスラーム研究を推し進めていた。第2次世界大戦前には、教外の宗教学者の寄稿を交えながら、天理教亜細亜文化研究所を中心に研究が進められていた。それらの研究成果については、『天理時報』や『日本文化』などの刊行物が主な発信媒体となっていた。そして、イスラームの動向への注視は、第2次世界大戦後も続いていった。

### 石橋智信の講演

『日本文化』は天理図書館の機関誌として出版されていた頃から、多くの宗教学者たちが寄稿していた。たとえば、石橋智信(1886～1947年)は、ユダヤ教やキリスト教に関心を抱いた宗教学者であった。彼は1939(昭和14)年に中国に渡航しており、現地ではイスラームやキリスト教をはじめ、天理教や神道の状況を観察した。そして、1940年4月11日に天理図書館講堂で、「支那の宗教事情」と題した講演を行っている。時局と連動し、イスラームについての関心が日本国内でも高まっていた時期である。

興亜院からの派遣命令は勿論宗教一般についてありますが、特に回教を取らべて来いといふ事でありました。それで私が回教に注意しましたのは、我が国でモハメット教と云いますと、教祖マホメットと聖典コーラン位にしか思つて居らない。回教への注意は、回教を信ずる国、民族、云はゞ回教圏が問題になって居て、宗教としては、一向問題にしてゐない<sup>(1)</sup>。

興亜院とは、1938(昭和13)年に設立された国家機関であり、おもに中国大陸を中心とした情報収集に当たっていた。石橋は、中国の宗教のなかでも特に回教、すなわちイスラームを中心とした調査依頼を受けたようである。しかしながら、日本におけるイスラーム認識を振り返ってみれば、イスラームという「宗教」ではなく、むしろイスラームに関連する国家、民族、また地域などが紹介されているにすぎない。石橋はこうした実感を、渡航の前年、東京の松坂屋で開催された展覧会で抱いたようである。

イスラームが「宗教」であるという認識が希薄であることについて、石橋は、「宗教の問題など、問題にしないで支那の回教に対して安心して居るのはゆゑしい大事であります」と述べている<sup>(2)</sup>。それは、スンナ派やシーア派などの諸派についての知識なしに、イスラームを理解することは不可能だからである。そこで、石橋は、イスラームの諸派を論じたことで知られるシャフラスターニー(Taj al-Din al-Shahrastānī, d. 548/1153)に言及しながら、中国や満州に法学者のアブー・ハニーファ(Abū Hanīfa, d. 150/767)の「ハニーファ派」(ハナフィー派のこと)が広がっていることを指摘した。

### 宗教と国家の関係

また、古野清人(1921～1979年)は、南満州鉄道東亜経

済調査局に在籍した後に、民族研究所第3部(中部・西部アジア)や第5部(東南アジアやインド太平洋圏)へと移籍した。2代真柱との親交もあり、戦後、天理語学専門学校の校長を務め、天理大学の開学にも大きく寄与した。彼は、『天理時報』に東南アジアを中心とした宗教状況を連載したこともあった。

第2次世界大戦後、植民地支配を受けてきた諸地域が次々と独立したが、それらの多くはいわゆる「イスラーム地域」であった。そのため、宗教と国家の関係性を理解することは、日本を含む世界の行く末と密接に結びついていた。

「世界における宗教の現状」(『日本文化』35号、1955年)のなかで、古野は、「ヨーロッパから見れば、今日では東洋は先ずイスラーム圏から始まっている」と述べ、イスラームの影響力がますます高まっていくことを予見した<sup>(3)</sup>。そして、パキスタンをはじめとするイスラーム国家の誕生のなかに、宗教復興の機運を見出した。激動する世界情勢を見通しながら、彼は、世界宗教の展開に国家との結びつきが不可欠であったことを指摘した。

この変動激しい時代に西欧的な技術と文化を排斥するようなイスラームの世界社会(Umm Islam)を建設しようとしても、その社会構造は過去の回教王国みたくなものになる惧れがある。諸国家における現在のイスラーム運動はむしろその熱狂的で暴力的な一派の宗教的不寛容と排他性からくる現行の秩序と組織に対する破壊的行動に重大性が認められる<sup>(4)</sup>。

ここでいう「回教王国」とは、カリフ制、すなわち宗教的権威と政治的権威が一致する政治体制のことである。古野は、第2次世界大戦への反省を踏まえつつ、政治と宗教の関係性に注目していた。それは、「宗教」を排除しようとする当時ソビエトの社会主義においても、「宗教」を政治に取り込もうとするパキスタンの宗教復興においても、イスラームが重要な役割を果たしていたからである。

### 宗教文化研究所員によるイスラーム考察

戦前の天理教亜細亜文化研究所から天理大学に移管、改称された宗教文化研究所でもイスラーム研究が継続されている。研究所員による報告としては、諸井慶徳の「回教要説」(『宗教文化研究所報』12号、1951年)、中村孝志の「南方地域の宗教伝播 インドネシヤ」(『宗教文化研究所報』16号、1952年)などがある。イスラームの基礎知識から、戦後の国家状況におけるイスラームの役割が言及されている。

また、塩谷敏明が「回教儀礼—清浄の部—」(『日本文化』24号、1946年)、「イスラームの寺院と礼拝」(『天理文化研究所報』5号、1949年)と題して、イスラームの礼拝前の浄めの儀礼や礼拝に関する小論を発表している。

このように、戦前のイスラーム認識が乏しい状況においても、また戦後のめまぐるしい宗教情勢においても、研究所ではイスラーム情勢は途切れることなく研究されていたのである。

[註]

- (1) 石橋智信「支那の宗教事情」、『日本文化』(18号)、1940年、2頁。
- (2) 同上、4頁。
- (3) 古野清人「世界における宗教の現状」(『日本文化』35号、1955年)、40頁。
- (4) 同上、47頁。